



よつば会だより

2017 年 8 月号

発行:NPO 法人

尾道こころネットよつば会事務局

尾道市 栗原東 2 丁目 17-86

TEL・FAX 0848-37-6600

次に示すのは、7月21日の産経新聞に掲載された、67歳の母親が書いた詩です。

「今日は雨降り そんな日は車で連れて行ってと言っていた息子が 雨合羽を着て1.5キロ離れた病院に一人で行った 三十年も苦しんできて 漸くここまで来た 一生続く道だけど 一筋の光明が差し込んできた」



統合失調症を疑う視点を



よつば会だよりに、私の娘の A 医師との出会い、転院のことを記事にしました。 その続報です。

先月号に「娘には甲状腺機能低下があり、妄想もそれが原因で引き起こされていることも考えられる。 場合によっては統合失調症でないかもしれない」という A 医師の話を書きました。 まだ状況を見ながらの治療を継続中で、結論的なことは報告できませんが、A 医師の「統合失調症でないかもしれない」という言葉が強く心に残りました。 そこにもう一つ同じように「統合失調症でないかもしれない」という見立てがあったという話が入りました。 統合失調症と診断されていたある男性が、別の精神科病院で診察を受けたところ、その病院の B 医師から、「あなたは統合失調症ではないかもしれない。 その理由は、あなたの統合失調症の発症が30代後半という、かなりまれなケースであること。 今飲んでる薬の量が少ないにもかかわらず、再発・入院になっていないこと。 以前の病院に入院したとき、翌日には回復していた。 統合失調症だったらこのような回復はちょっと考えられない」と話されたということです。

この二つの話から思いました。 わたしの娘の場合、統合失調症という診断がなされて13年が経っています。 入院・通院を含めて、主治医として治療に当たってもらった医師は、10人を超えているでしょう。 しかし、これらの医師の誰一人として、娘が統合失調症でないかもしれないと考えた人はいませんでした。 A 医師が初めてでした。 ひとたび統合失調症という診断を下されると、ほとんどの医師はそれを疑うことなく抗精神病薬の投与の中で治療を続けるということなのでしょう。 B 医師は「仮に統合失調症でなく、例えば発達障害の人が統合失調症の薬を処方されそれを飲み続けると、よい作用はなく副作用しか感じられないでしょう。 もし私がその薬を飲んだらへっぺりになってしまい、副作用しか感じられないのと同じことです」とも話していたということです。 統合失調症と診断されている全ての人に、統合失調症でないかもしれないというわけではありません。 統合失調症という病気は確かに存在します。 その治療には抗精神病薬の投与は必要です。 しかし、たとえまれなケースであったとしても、統合失調症でないのに統合失調症と診断されて、抗精神病薬を長年飲み続けることがあれば、当事者にとっては大変不幸なことです。 そのようなことが生じないように、医師は統合失調症と診断されている患者に対して、そうではない可能性もあることを視野に入れて診察することも必要なのではないかと考えます。

私も娘がいつまで経っても急性期のような状況を繰り返していることに疑問を持ち、主治医に度々尋ねてみたのですが、それが統合失調症という病気の特徴なのですからぐらいいい答えしか聞くことができませんでした。 それに対し A 医師は、「妄想は甲状腺機能低下のような内科的要因で生じることもあり、また、双極性障害でも生じることもある。 その辺りのことを一つひとつ確かめていく必要がある。 まずは甲状腺機能がいい状態になったときに、どう変化するか、また変わらないかを見て、変わらなければ、これまで飲んできた抗精神病薬をできるだけ減らしていき、その後双極性障害対応の薬を投与していくなどで様子を見ていく。 時間はかかるがやっています」と話してくれています。 これでこそ患者に正面から向き合う治療だと思えます。(N.T)

7月の活動報告

- 09日 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 26日 よつば会家族教室(市民センターむかいしま)

8月の活動予定

- 06日(日) 当事者との交流会 (サロンよつば)
- 30日(水) 家族の SST (市民センターむかいしま)
(会場がいつもの研修室1から研修室4に変わっています)





“精神科医師は変わらないといけない”

～夏苺郁子さんの講演から～



「みんなねっと」誌7月号に、今年3月に東京で開催された「みんなねっとフォーラム2016」で、夏苺郁子さんが行った講演内容が掲載されました。夏苺さんは、**やきつべの径診療所の精神科医師**で、ご本人も精神科の治療を体験されています。

講演のテーマは「それぞれの自立をめざして～本人・家族・医療者が、ともに考えられる社会へ～」でした。夏苺さんは講演の冒頭で次のように話しています。「今日のそれぞれの自立というテーマは、とても素晴らしいと思いました。私は『それぞれ』という中に、当事者・家族はもちろんのこと、医師、医者も、ここに絶対入らないといけないと思っています。なぜなら、三者ともに精神科医療の運命共同体、同じ船に乗っている身だと思うからです。これまでの家族会での講演は、家族がどう感じるかに視点があったように思います。家族を支援すると、家族が元気になる。家族が元気になると、当事者を支援する力が増して、当事者も元気になる。これも本当だと思います。でも、医者が変われば当事者も元気になる。**医者が変われば家族も元気になるとはどうして言わないのかなって、そう思っていました**」

このように夏苺さんは「医者が変わらないといけない」と問題提起をしています。講演内容は、夏苺さん自身が精神科の治療を受けた中で思ったことなど、多岐にわたっていますが、ここでは「医者が変わらないといけない」というところに絞ってお伝えしていきます。提起はさらに続きます。

「社会復帰・地域医療に熱心なあるドクターの言葉です。『必要なのは、発想を変える覚悟です。当人の本当にやりたい気持ちをしっかりサポートするのが、家族や医療者であろうと思いますが、医者はなかなかかわれませんか』私は医者自身が『医者はなかなかかわれませんか』と聞き直しては、日本の精神科医療は変わりようがないと思います。もし、ご自分のご家族が病気になっても、同じことをおっしゃるのでしょうか。そう思いました。日本の福祉制度は、医師の診断書がないと先に進めないシステムになっています。だからこそ医師の方が発想を変える覚悟を、私は持つべきだと思います」

さらに夏苺さん自身の治療を受けた体験から、次のようなことを話しています。「精神の病気は、どこがどう悪いのか、診断の根拠は何か、薬はどう作用するのか、そして、私っていつ治るのか、そういう治療で一番大切なことを説明されなかったことが、当事者としての苦しさです」、「よく考えてみれば、医師は処方しますが、自分で薬を飲んだことないのです。副作用についても教科書で学んだだけで、実際に自分では経験していません。実際の経験という意味では、医師ほど無知な人はいないと思っています。皆さんの方がよっぽど知識があります」

以上、問題提起にかかわるところをいくつか拾い上げてみました。夏苺さんは医師が変われば当事者・家族も元気になる筈だと話しています。そこで、医師がどのように変わることで、当事者・家族が元気になれるのかと考えてみました。その一つは、現状多くの医師が治療の方向、投与する薬のこと、今後の見通しなどを、当事者・家族が納得し、希望が持てるように詳しく説明する熱意を持っていないように思います。当事者も家族も常に不安を感じています。その気持ちに対して、何度でも説明する熱意です。この熱意が医師への信頼となり、当事者・家族の元気につながると思います。

最後に、夏苺さんの次の言葉を紹介します。「**信頼できる医師に出会うことが、宝探しであっては決ま**
けないと思っています」